1. 夏祭深川不動

一

旧暦４月、初夏――。

坂崎磐音は深川六間堀の金兵衛長屋で蒸し暑い日を過ごしていた。

親友二人を失った明和九年の夏から一年が経とうとしていた。

気温が上がったせいか、鰻割きの仕事は忙しかった。

磐音は毎朝七つ半に、北の橋詰の鰻屋宮戸川にかよってひたすら鰻と格闘していた。

二月ほど前、日当が七十文から百文に値上がりした。そのせいでなんとか暮らしが立っていた。だが、このところ纏まった金が入る仕事はなかった。

この朝、磐音は宮戸川の仕事の帰りに、貧乏御家人の次男坊、品川柳次郎を北割下水の拝領屋敷に尋ねた。拝領屋敷に尋ねた。

拝領屋敷といえば聞こえがいいが、何十年と手入れもされていない壊れかけた屋敷だ。それでも御家人のこと、敷地は二百坪ほどおｎ広さがあった。

この辺りの御家人の屋敷では庭を畑にして季節の野菜などを植え、家計の助けにしていた。品川家でも御多分にもれず、青菜や茄子などを栽培していた。

「坂崎さんか」

畑に水を撒いていた柳次郎が、首に巻いた手拭いで額の汗を拭きながら振り見た。

「何ぞ仕事はありましたか」

「近頃、何もありませんね。口が干し上がってどうしようもない」

「この暑さでは、どこもがうんざりしていますからね」

「暑気払いに一杯といきたいが、あいにく銭の持ちあわせもない。またにしましょうか」

しばらく雑談した磐音は柳次郎に分かれを告げると、深川六間堀の金兵衛長屋に戻った。

九尺二間の長屋には温気が充満していた。

磐音は狭い裏庭の障子を開けると風を入れた。

水甕を除き、米櫃を確かめた。

かさりと底に残っているだけだ。

「なんとかしなければ」

独り言を呟きながら、残った米を釜に移した。井戸端に持って行こうと立ち上がったとき、戸口に誰かがった気配がした。

顔を上げると、富岡八幡宮前で金貸しとやくざを二枚看板にした権造一家の代貸の五郎造と視線が合った。

「五郎造どのか、暑いな」

「親分かお呼びだぜ」

「そういえば親分には借りがあったな」

「覚えていたとは殊勝なこった」

五郎造がにやりと笑った。

「暫し待ってはもらえぬか。腹が減って戦はできぬと申すでな」

「ちぇっ。このくそ暑いのに、大の男が飯を炊くのを待てるけえ。飯ぐれえ、うちに来ればたらふく食わせてやるぜ」

「きょうか。仕度をいたすゆえ、しばらく門前でお待ちあれ」

「おめえさんと話してると日が暮れるぜ。早くしねえ」

磐音は五郎造を待たせ、備前包平二尺七寸と無銘の脇差一尺七寸三分を腰に差し落とした。それで仕度はできた。

六間堀町から富岡八幡宮まで五郎蔵と肩を並べて歩きながら、磐音は訊いた。

「親分の頼みごとはなにかな」

ひと月前、鰻捕りの幸吉が泥龜の米次に拐かされたことがあった。

そのとき、権造親分の手を借りて幸吉の行方を探したのだ。その返礼に、磐音は一度だけ剣の腕を貸す約束をしていた。

その取り立てに五郎造がきたのだ。

「おめえさんは深川不動が知っているけえ」

「前を通ったことはあるが、参拝したことはござらぬ」

「ござらぬときたか。あそこはうちの稼ぎ場だ」

深川不動は、元禄十六年に成田山が永代寺の門前を借りて、不動尊の出開帳をした時に始まる。以来しばしば、成田山新勝寺をはじめ、出開帳で人を集めていた。単に不動堂とも呼ばれて、地元の者に親しまれていた。

「深川不動の夏祭りは、うちの親分と川向うは浅草黒船町の勝八親分が交互に仕切る習わしになっていた。ところが、つい２日前、深川不動に打ち合わせに行ったと思いねえ。するとよ、顎の勝八の所から子分どもが来て、相談は済んだというじゃねえか。なんて話だってんで、親分とおれと黒船町に乗り込んだってわけだ。すると顎の野郎め、今年の夏祭りが深川不動はうちで仕切らせてもらうぜって、ふざけたことを抜かしやがる。親分が怒りなさって、顎、てめえはおれに喧嘩を売る気かと怒鳴りなさったが、顎の野郎、平気の平座でよ。ああ、そういうことだってぬかしやがったのさ。おれも親分も腸が煮えくりかえったが、浪人者まで出てきやがって、多勢に無勢だ。そんときは堪えに堪えて橋を渡って戻ってきたってわけだ。売られた喧嘩だ、こっちも人手を集めて出入りの仕度を始めた。ところが、昨日のことだ、うちの関わりの櫓下の女郎屋に五人の浪人者が上がって、遊女を揚げて盛大に飲み食いしたあげく、朝方、勘定が欲しければ顎の勝八親分に請求しろといったというじゃねえか。そいつを聞いた親分がかんかんに怒りなさってよ、子分を差し向けたと思いねえ。ところが浪人どもは腕に覚えがある野郎どもで、散々な目に遭わされてよ、四人が手足に怪我をして、医者の所に担ぎこまれたってわけだ。」

話の目処（めど）がついた頃、磐音と五郎造は、富岡八幡宮前の権造一家の戸口の前に辿り着いていた。

一家は殺伐とした重い空気に囲まれていた。奥座敷には喧嘩仕度の子分たちが控えている気配だ。

磐音は始めて権造の居間に通された。

多きな神棚の前の長火鉢には、派手な浴衣の権造がでんと座り、苦虫を噛み潰したような顔で磐音を迎えた。

「おめえさんに貸しがあったな」

「五郎造どのにも同じことを言われた。親分、念を押すまでもない」

「話は聞いたか」

「浪人五人にただで飲み食いされたようだな」

「飲み食いばかりか、子分四人が使いものにならねえ。金もさることながら、おれの面子が立たねえや。このままじゃあ、稼業にも差し障りがあらあ」

「顎の親分とはこれまで仲良くやってきたと聞いたが、急に何が起こったのかな」

「そこだ。顎の勝八は元々黒船町の先代の代貸だった男だが、先代が去年の暮れに急死しなすったあと、姉さんを誑し込んでよ、跡目を継いだんだ。先代は仲間とも町奉行所ともうまくやっていたもんで、顎の野郎には北町の臨時廻り同心がついていやがる。定廻り同心を長年務めた月形彦九郎という男だ。こいつは寺社方とも仲がいい。こいつの力を借りて、顎の野郎は川のこっちにも縄張りを広げてきてやがるんでえ」

「親分、顎の一家には何人も浪人者がいるという話ではないか。そいつらも月形どのの手下かな」

「浪人の頭領は、深甚流とかいう剣術の達人飯岡一郎助でよ、顎一家の近くに町道場を開いている三十五、六の大男だ。こいつの所に食い詰め浪人がごろごろしてるのさ。うちの関わりの見世で飲み食いしやがったのもこいつらだ」

「浪人どもは別にして、北町の同心どのが厄介だな」

「なんぞ知恵を働かせてくれ。おめえには貸しがあるんだからな」

「親分、そう何度も貸し貸しと言わんでもらいたい。それがしもこうして顔を出しておるのだ。十分、相談には乗るつもりだ」

言わねは考える素振りを見せた。

「親分、北町同心の始末はそれがしにまかせてくれ。少々時間が架かるやもしれぬがな」

「おめえさん、安請け合いしていいのけえ」

言わねには考えがあった。だが、そう易易と権造に話すつもりはない。腹をすかせた仲間がほかに二人もいるのだ。

「今年の夏祭りはなんとしてもうちで仕切る。祭りまでには３日をきってるが、それまでには決着をつけてえ」

「まかせてもらおう。まずは深甚流の用心棒の退治から取りかかろうか。その前に二つばかり相談だ。いささか腕に覚えがあっても、大勢の浪人相手に某一人で獅子奮迅の働きはできぬ。そこで二人ばかり助太刀を頼もうと思うが、よいかな」

「二人だと。仕方あるめえ」

「某はただ働きでかまわぬが、助太刀を頼む以上、仲間はそうはいくまい」

「仕方あるめえ、二人は一日一両でどうだ」

「今一つ、それがし、腹をすかせておる。飯を馳走してくれぬか」

「呆れた野郎だぜ。五郎造、台所でなんぞ食わせてやれ」

そう命じた権造はどこかほっと安堵の色を見せた。

蛸のさくら煮、牛蒡、人参、蒟蒻、椎茸などの野菜と、鶏を炊き合わせたものなど、金貸しとやくざの稼業はなかなかの繁盛とみえる。

「おまえさん、よく食うな」

満足げな表情で茶を飲む磐音を見て、中年の勝手女中のおかつがびっくりした顔で行言った。

「味付けが実に結構でござった。母上の料理とよく似ておりました」

女中は笑みを浮かべた。

「おまえさんのおっ母さんはどこにおられるだね」

「江戸から二百六十余里も離れた西国でござる」

「江戸で腹を減らしてると知れば、心配もされようが。おまえさんも、ちったあ性根を入れて働かねばなんねえぞ」

女中は磐音に説教を垂れた。

「そうじゃな、いつまでも心配をかけてはならぬな」

磐音は真剣にそう思った。

「おめえさん、いつまで台所に座り込んでいるつもりでえ。飯を食った分だけ働きやがれ」

五郎造が台所に顔を出して怒鳴った。

「そろそろ神輿を上げようと思っていたところだ。まずは人集めに参る。今夜からこの家に泊まることになるが、それでようか」

「親分もその気でいなさる。仲間を連れて夕刻までには戻ってきてくんな。またこの前みてえに、顎一家の浪人どもに好き放題飲み食いされねえとも限らねえからな」

五郎造は磐音を頼りにしているように言った。

「五郎造どの、任せておいてくれ。その代わり、飯だけは昼のように存分に頼む」

「なんて情けねえ侍でえ」

五郎造は舌打ちした。それでも、

「早く行ってくんな」

と送り出した。

磐音は今朝ほど訪ねたばかりの北割下水に、再び品川柳次郎を訪ねた。すると、柳次郎派井戸端で裾をからげて洗濯をしていた。

盥は汚れ物で溢れている

「精が出ますか」

「母上の手伝いですよ」

品川柳次郎が苦笑いし、

「坂崎さんが二度もうちに顔を出すとは、仕事が見つかりましたか」

と期待に満ちた顔をした。

「富岡八幡宮前でやくざと金貸しを兼業する親分の用心棒の口がありました。一日二分、三度三度の飯付きです。やりますか」

「もちろんやります。母上の手伝いをしたからとて一文にもなりませんからね。用意する間、しばらく待ってください」

壊れかけた門前で磐音が待っていると、柳次郎の母上の幾代が顔を出した。まくわ瓜を一切れ載せた皿を手にしていた。

「柳次郎がいつもお世話になります」

磐音は慌てた。未だちゃんとした挨拶をしたことがなかった。

「こちらこそ世話になっております。それがし、六間堀の金兵衛長屋に住まいいなす坂崎磐音と申す者にございます」

「お話は柳次郎から伺っていますよ」

磐音はふと、年格好が同じくらいの故郷の母を思い出した。

「こんなものしかいありませんがよう冷えております。お食べなさい」

「頂戴します」

富岡八幡宮から急いで来た磐音には、冷たく冷やされたまくわうりがなんとも美味だった。

「お待たせしました」

よれよれの単衣の着流しに大小を落とし差しにした品川柳次郎が出てきて、

「瓜を食わされましたか。庭で穫ったものであまり甘くはないでしょう」

とわらった。そして幾代に、

「母上、坂崎さんが仕事を持って参られた。首尾よくいったらなんぞ美味しいものでも買うて戻りますぞ」

と言い残すと磐音を誘って門を出た。

二人の足を南割下水吉岡町のどんづまりに住む竹村武左衛門の半欠け長屋に向かった。貧乏御家人や食い詰め浪人らが多く住むその一帯は、本所深川界隈でも一段とひどい場所だ。

夏の季節、縦横に走る溝は乾ききって、ぼうふらが湧水もない、ただ埃っぽい家並みが黄ばんだ洗濯物の間に広がり、むうっとした湿気と饐えた臭いが立ち込めていた。

「竹村さん、仕事だぞ」

武左衛門が出てくる前に、長女の早苗と長男の修太郎が飛び出してきた。

「ああ、良かった。父上と母上は数日前んい喧嘩して以来、口も利かれないのです。これで仲直りができそうです」

母親の勢津が乱れた髪を気にしながら出てきて、

「これ、早苗、うちの恥を他人様に大声で話すものではありません」

と制止したがもはや遅い。

「勢津どの、仲直りができそうな仕事の口を坂崎さんが見つけてこられた。もうしばらくの辛抱です。二、三日待ってください。」

竹村武左衛門が塗の剥げた刀を手に姿を見せ、

「待たせたな」

「行き先は富岡八幡宮です」

「唐天竺でも参るぞ」

とほっとした顔を見せた。

本来、南割下水とは旗本諸家が屋敷を連ねる一帯である。ところが武左衛門の住む吉岡町は、南割下水とは名ばかりの極貧のものたちが住む一角だ。町内を抜けると武左衛門は大きな溜息をついた。

「勢津どのとの喧嘩は金のことですか」

「ほかになにがある」

武左衛門は柳次郎に突っかかるように言い、慌てて取り繕った。

「すまぬ。家内の揉め事でつい気が立ってしまった。坂崎さん、仕事とはどんな類かな」

磐音は権造一家に降りかかった難儀について話て聞かせた。

「ちょっと待った。坂崎さんはただ働きか」

「借りがあるので仕方がありません。そのうちよいこともあるでしょう」

「坂崎さんらしい話だが、ただ働きはしんどいな」

「坂崎さんも柳次郎も考えが足りぬな。それがしの見立てでは、やりようによっては銭になる話だ。坂崎さんとて、権造に借り分以上の義理はあるまい」

「幸吉の行方を探し出してくれた借りを返せばいいだけですが、相手が北町奉行所の臨時廻り同心ともなると厄介ですよ」

「そっちは坂崎さんの知恵の絞りどころだ。それがしが言うのは、顎の勝八と権造親分をうまく操る事ができれば、それなりの金になるということだ。」

「竹村の旦那、坂崎さんの性格を考えてみろよ、小さいとはいえ借りは借りだ。それを裏切って顎の勝八に寝返るなんてできっこないさ」

「それがしは裏切れなんて言ってないぞ。二つの争いの間隙を衝けば金が転がり込むと言っているだけだ」

「そいつに期待しよう」

品川柳次郎がその話題に蓋をするように言った。

「深甚流の飯岡一郎助について、お二人は何ぞご存じないですか」

あると答えたのは竹村武左衛門だ。

「深甚流は元々、加賀の百姓の子である草深四郎が始めた剣法でな、塚原卜伝に新当流を習って深甚流天狗小太刀の開祖になったそうな。加賀に中条流が入る以前は深甚流が加賀のお家流だったというぞ。飯岡一郎助は、この深甚流直系を名乗っている男でな、六尺二十貫を超える巨漢だ。それがしが一度黒船町を通りかかった折りに道場を覗いたことがある。利き腕の右手に四尺余りの木刀、左手に二尺余りの小太刀を持って稽古する様は、まさに仁王か阿修羅の形相でな、なかなかの腕前とみた。それに顔が鬼瓦のように物凄くてな、まあ、闇夜には会いたくない御仁だな」

「一度拝見するとしよう」

と磐音が答えた時に、三人は富岡八幡宮前の権造親分の家の前に辿り着いた。すると玄関が騒がしい。

「おおっ、帰ってきたか」

五郎造が声を上げた。玄関先に露天商の男たちが六、七人いて、権造に何か訴えていた。

「いいとこに帰ってきたぜ。こいつらはよ、本所深川一帯で祭りを追って商いをする香具師の連中だ。不動堂でも見世を春ことになっているんだが、顎の勝八のところから回状がきたそうだ」

権造親分は手にしていた回状を、ふざけた話だぜと言いながら磐音に渡した。

磐音は書状を広げた。達筆である。

通告状

この度、本所深川一帯の神仏閣についての祭礼仕切りは浅草黒船町の顎の勝八の仕切るところになりし事、お呼びこの一件、北町奉行所臨時廻り同心月形彦九郎様お許しの旨、通告致し候。

この変更に伴い、

1. 露天商いのショバ代一祭礼につき一店一日一分、半金前納の事
2. ショバ割は三日前の昼前、祭礼地にて挙行決定の事

右通告致し候

「ふざけた真似をしやがって、このおれの面を踏みつけにするにもほどがあらあ。旦那方よ、ショバ代は昔から一日二百文ときまってるんだ。そいつを一気に五倍にねあげたあ、一体全体どういうこった」

権造が顔を真赤にして怒鳴った。

「親分、われらに怒った所で致し方あるまい。どうせよと言われるのかな」

「こいつらはおれに、顎に掛けあって元に戻してくれといっていやがるんだ。どうしたもんか」

権造も思案に暮れた表情だ。

「親分、ここは一番、親分自身が貫禄をみせて、顎の勝八に直々に掛け合うしかあるまい」

「おれがいきなり面ぁ出すのけえ」

金貸しの権造は尻込みした。

「親分、顎の親分の顔も見ておきたいでな、それがしも同道しよう。それに香具師の方々も何人かご一緒願おうか」

「親分、わしらもですかい」

露天商たちも怯えた顔をした。

「そなたらに宛てた回状ではないか。当人が持参せずば名目が立つまい。なあに、そなたらニケがをさせるようなことはさせぬ」

磐音が請け合い、香具師たちが額を寄せて話し合った末に、二人が代表で出向くことに決まった。となれば、金貸しの権造も出張らないわけにはいかない。

「五郎造、猪牙舟を用意しな」

と命じた。